

日本発達心理学会 関西地区懇話会

2025年3月8日

立命館大学 総合心理学部 教授
矢藤 優子

※当日発表資料から一部抜粋しています



矢藤 優子 (やとう ゆうこ)
博士(人間科学) Yuko Yato, Ph.D.



立命館大学 総合心理学部 教授
(乳幼児心理学/比較発達心理学)

立命館大学人間科学研究科研究科長・総合心理学部学部長 (2025年4月～)

立命館大学研究部 研究者学術情報データベース

<https://research-db.ritsumei.ac.jp/rithp/k03/resid/S000452;jsessionid=5B5A566DCF2EE6CE0B4E7D158DC443BE?lang=en>

RARAアソシエイトフェロー HP

<https://rara.ritsumei.ac.jp/fellows/yuko-yato/>

アジア・日本研究所 HP

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/research/kyousei/04.html/>

矢藤研究室 HP

<http://r-giro-3rdyato.jp/yato/index.html>



シームレスな対人支援に基づく人間科学の創成

プロジェクトリーダー: 総合心理学部教授 矢藤優子



QOL指標

グループ5

シニアライフ支援とコミュニティダイバーシティ促進に関するエビデンス創出

グループ4

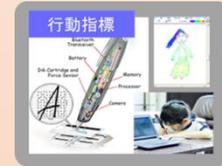
地域主体の健康作りと日本社会価値の国際比較研究



幸福指標

グループ1

科学的根拠に基づく子育て支援



行動指標

グループ2

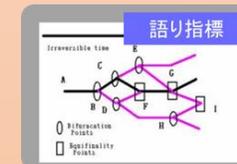
神経科学・生理学手法による「教授-学習」研究



生理指標

グループ3

ライフに接近する質的研究法によるキャリア発達



語り指標



複数の手法を用いたシームレスな支援へ

「いばらきコホート」調査

— 科学的根拠に基づく子育て支援のための学融的研究 —

〈目的〉

胎児期から幼児期(6歳)までを継時的に調査し、子どもの育ちと養育者の子育てを客観的に捉え、それらに影響を与える社会的・物理的環境要因を解明する

胎児期

乳児期

幼児期

児童期

茨木市こども健康センターとの連携

- 協力者の募集（母子手帳発行の際に、チラシを配布）
- 緊急支援が必要な場合、茨木市の支援機関等の紹介

立命館グローバル・イノベーション研究機構 (R-IGI) 第三期拠点形成型研究プログラム
「学際的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく社会政策の再構築」プロジェクト



研究協カメンバー 募集

妊娠・子育て・子どもの成長についての研究
私たちは、妊娠期のお母さんの心の健康や出産後のお母さんとお子さんのコミュニケーションについて研究しています。
アンケート調査などの研究に参加して頂ける方を募集しています。

調査にご協力頂いた方には
Amazonギフトカードをプレゼント致します。
また、ご希望の方には
妊娠期・子育てに関する
メールマガジンを配信致します。その他、
オリジナルグッズもご用意して
お待ちしております。



ご関心のある方は
こちらから

※研究の内容や参加にあたり、何らかの弊害がございましたら、下記までご連絡下さい。

研究代表者 立命館大学 産科心療学助教授 矢野 美子
〒565-0871 大阪府茨木市南長瀬2-1-10 立命館大学大槻いばらきキャンパス
E-mail: yano@igist.ritsumei.ac.jp



「いばらきコホート」調査

— 科学的根拠に基づく子育て支援のための学融的研究 —

< 妊娠期からはじまる縦断研究 >

- 質問紙による親子の心身健康に関する調査
- 行動観察による親子の社会的関係性評価
- 生理指標を用いた調査（唾液中のコルチゾール、オキシトシン）

量的研究

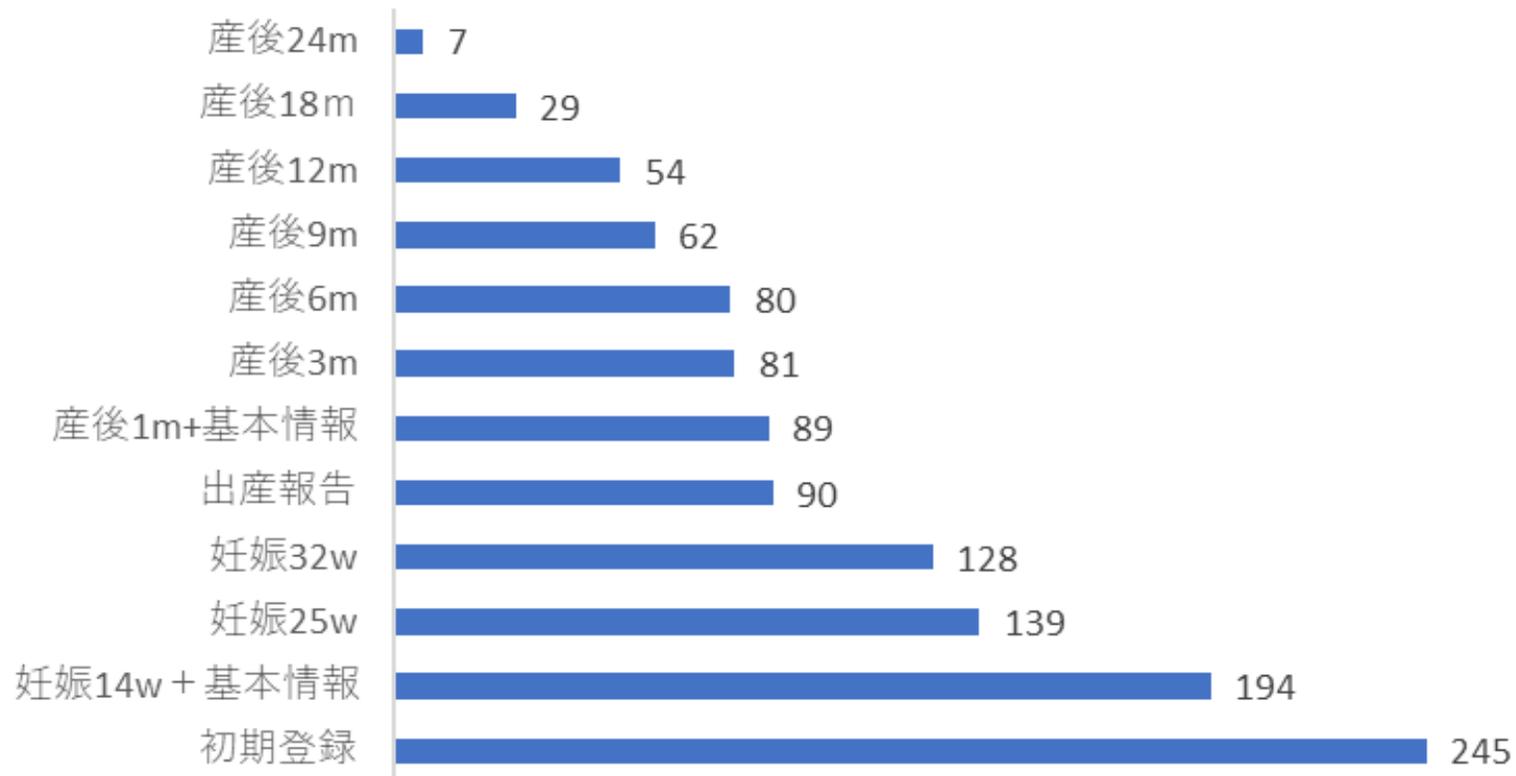
- 妊娠期・育児期女性のキャリア展望に関するインタビュー調査

質的研究



	5月13日
初期登録	245
妊娠14w + 基本情報	194
妊娠25w	139
妊娠32w	128
出産報告	90
産後1m+基本情報	89
産後3m	81
産後6m	80
産後9m	62
産後12m	54
産後18m	29
産後24m	7
脱落者	101

WEB調査回答人数



調査スケジュール

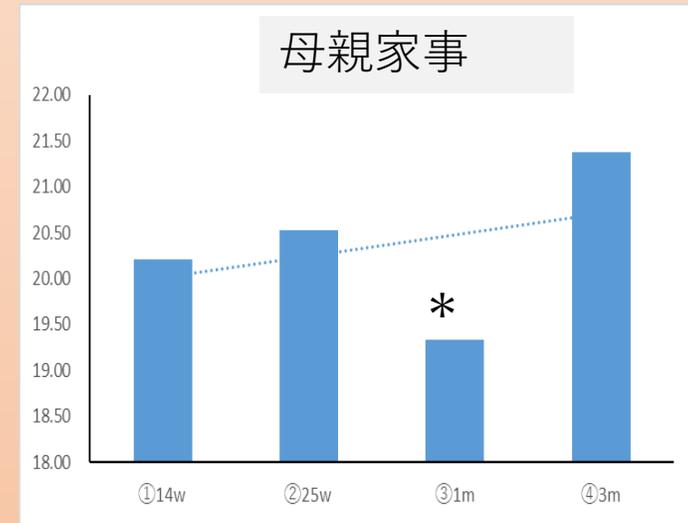
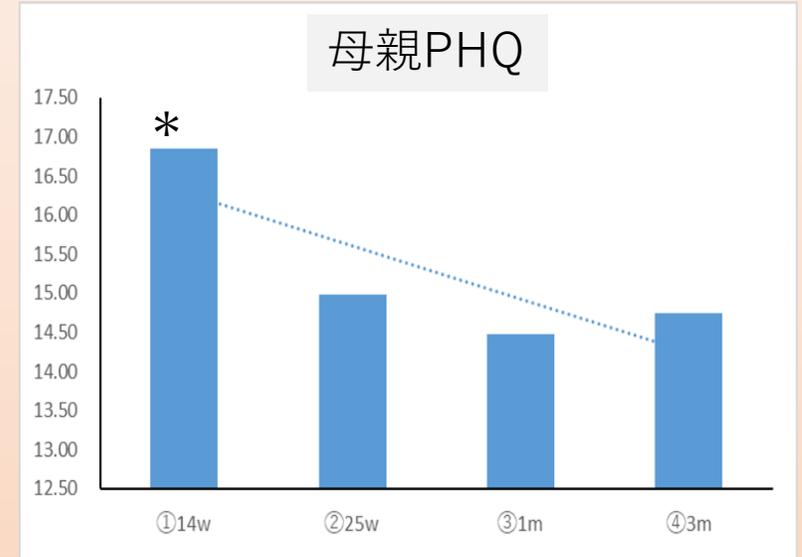
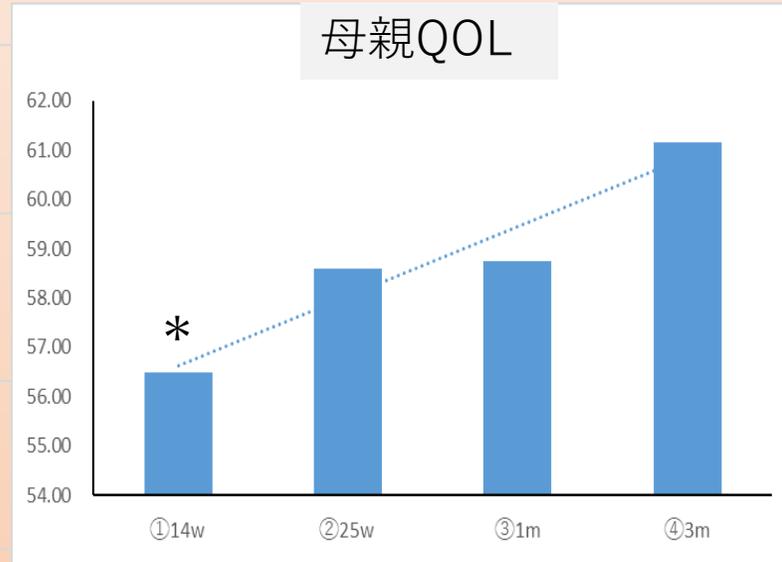
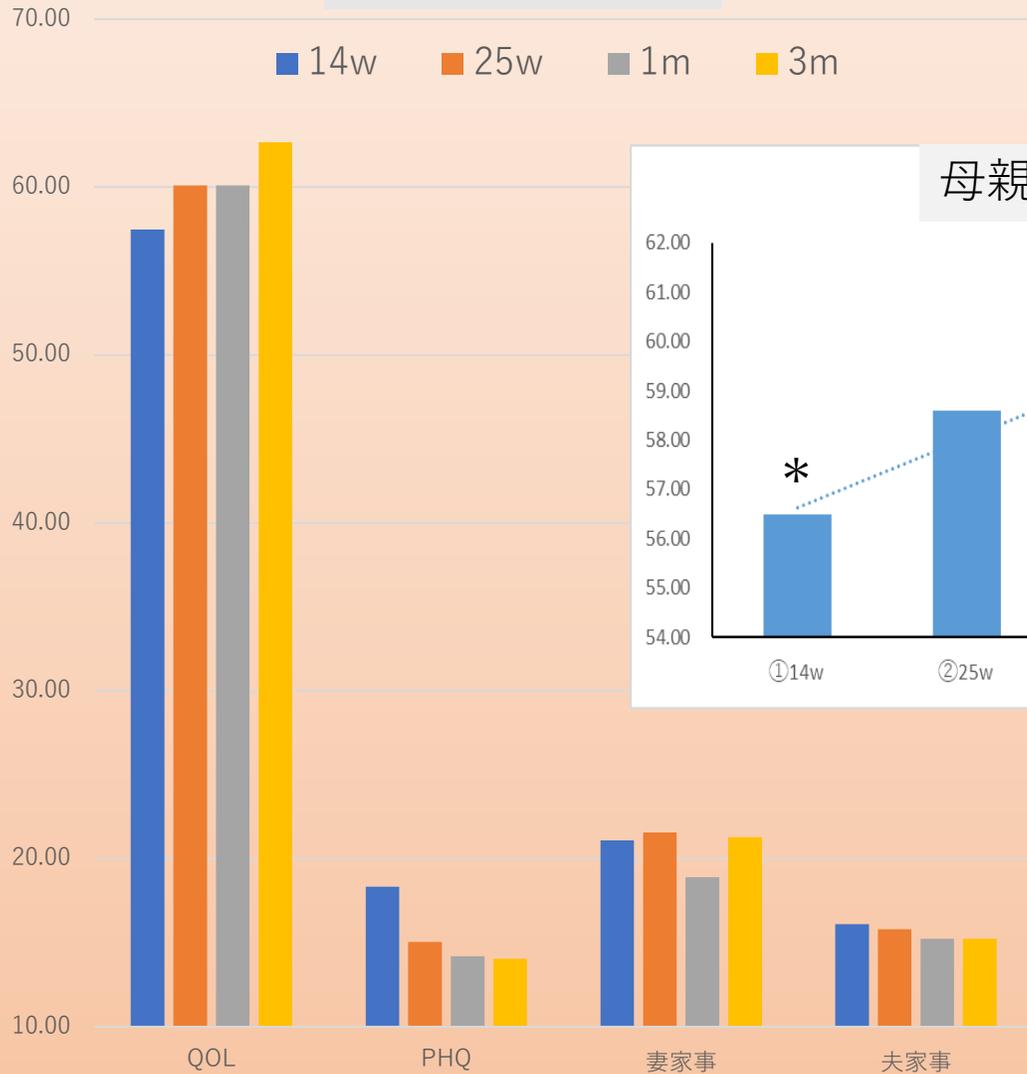
対象	調査項目	尺度	14w	25w	32w	1m	3m	6m	9m	12m	18m	2y	3y	4y	5y	6y	
子ども	気質	月齢により変更						IBQ-37	IBQ-37	IBQ-37	IBQ-37	ECBQ-36	ECBQ-36	CBQ-36	CBQ-36	psTCI-84	
母親	基本情報	フェイス項目	参加登録時に回答														
	気質	ATQ-77			○											○	
	うつ	PHQ-9	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	育児環境	ICCE								○	○	○	○	○	○	○	
	被養育方式	PBI-25					○							○		○	
	養育態度	PBI-11								○		○					
	育児ストレス	簡易版育児ストレス尺度									○						
	生活の質(QOL)	妊産婦用QOL	○	○		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○
	インタビュー	半構造化面接			○												
	唾液調査	コルチゾール/オキシトシン		○	○				○	○	○		○	○	○	○	○

表1 産後1カ月調査までの各調査における調査事項

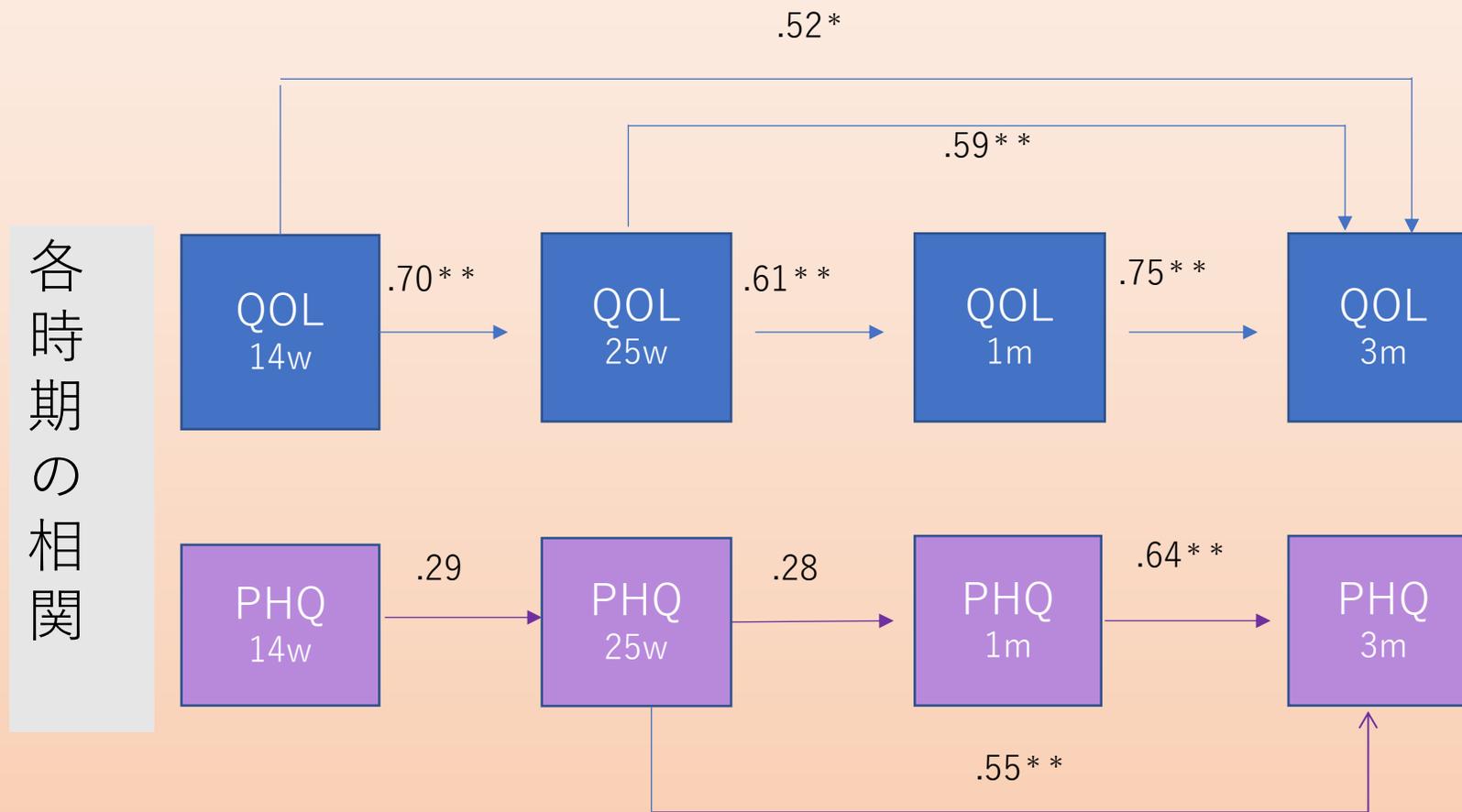
		測定内容	尺度/方法	リクルート時	14w	基本情報調査	25w	32w	1m	
母親	web調査	リクルート時情報	名前/茨木市在住か否か/妊娠週/メールアドレス	○						
		基本情報	メールアドレス・生年月日			○	生年月日のみ	○	○	○
			デモグラフィック（家族構成、就業状況、キャリアコース、学歴、収入）			○	○	一部のみ。 14wから変化があれば		
			生活実態（家事・育児）				家事のみ		家事のみ	○
			生活実態（性別役割分担意識について）			○		○		
			過去～現在の健康状態について			○	○	妊婦検診についてのみ		
			妊娠期～産後の健康状態について							○
			産後の仕事への復帰について					○		
			産後の滞在場所について							○
		うつ	PHQ-9			○		○		○
	生活の質	妊産婦用QOL			○		○		○	
	気質	ATQ-77						ATQ-77		
	面接調査	半構造化面接					○(調査協力者の体調等に合わせて適宜実施)			
	唾液検査	コルチゾール・オキシトシン					○	○		
母子	観察調査	かわり指標等						○		

結果 1 : 産前14w-産前25w-産後1m-産後3m (全体平均値比較)

各時期の変化



結果 2 : 産前14w-産前25w-産後1m-産後3m



各時期の間に有意な相関があった。

ある程度の安定性が見られたから、環境の一貫性以外に、個人内要因による安定性？
⇒個人の気質・性格についても検討

結果 3 : 母親のpersonalityと妊娠期14wにおけるQOL/PHQとの関連

TCI気質・性格

	Persistence		Self-Directedness		Cooperativeness	
	ambitious	PS_Total	responsibility	self-acceptance	empathy	helpfulness
QOL	-.228	-.156	.316*	.351**	-.168	-.142
PHQ	.311*	.254*	-.130	-.305*	.273*	.284*

自己受容

ATQ気質特性

	Negative Affect			attentional control	positive affect	associative sensitivity
	fear	sadness	discomfort			
QOL	-.305**	-.498**	-.392**	.269*	.324**	-.336**
PHQ	0.162	.256*	.305**	-0.108	-.402**	.302**

否定的感情

肯定的感情

連想的敏感性

主観的well-beingは個人の気質・性格特性と有意な相関がみられた

いばらきコホートにおける周産期うつについて

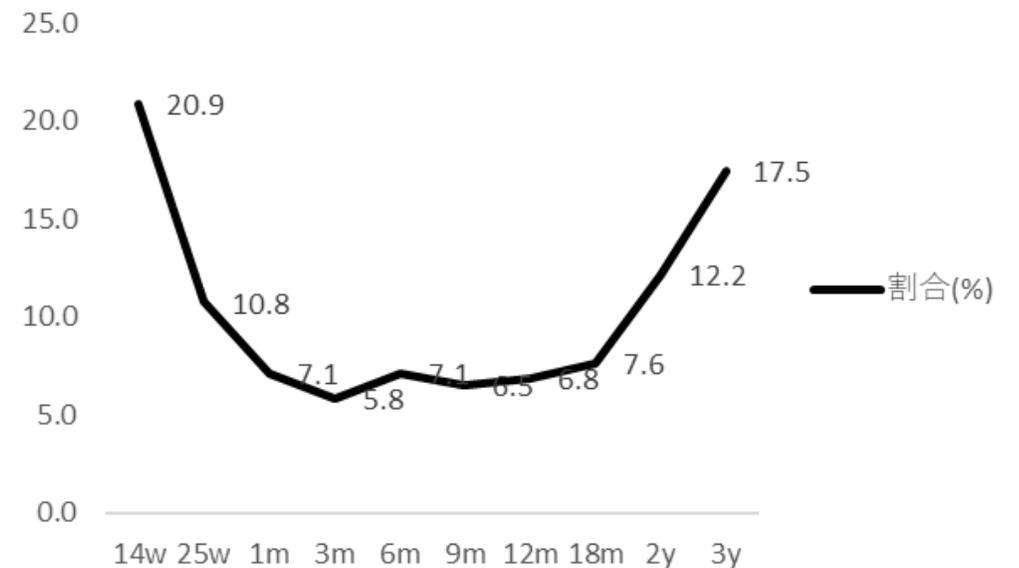
表1 抑うつの時期と人数

	14w	25w	1m	3m	6m	9m	12m	18m	2y	3y
データ数	153	158	84	120	127	123	117	105	74	40
人数(人)	32	17	6	7	9	8	8	8	9	7
割合(%)	20.9	10.8	7.1	5.8	7.1	6.5	6.8	7.6	12.2	17.5

表2 月齢ごとの抑うつの人数と割合

妊娠期	育児期	継続して
31	25	10

抑うつの割合(%)



コロナ禍の影響について

いばらきコホート協力者（約250名） および茨木市 に在住する0-6歳児を持つ母親を対象とした コロナ禍におけるニーズ・困りごと調査を実施

茨木市在住の妊産婦を対象として、COVID-19の感染拡大によって妊娠や育児を取り巻く環境がどのように変化したのか実態把握を行った。

- ①家族の基本情報・慢性疾患・ワクチン接種状況
- ②親子のQOL (WHO5/WHOQOL-BREF)
- ③コロナに関する情報の収集方法・信憑性
- ④コロナ感染拡大に伴う生活の変化（子どもへのかかわり、家庭内の問題などを含む）

調査時期・対象者数

- 2020年9月 (116名)
- 2021年2月 (112名)
- 2021年6月 (104名)
- 2022年1月 (467名)
- 2022年8月 (91名)

2021年度 いばらき×大学連携共同研究提案

「withコロナ時代における子育て世帯の実態・ニーズ調査と支援の充実—茨木市をさらに子育ての街に—」

蔓延防止等重点措置期間に茨木市との共同研究として実施

表1 コロナ禍で困っていると感じる物事について (n=452)

項目	はい	いいえ	割合	順位	χ^2	p
1 普段の外出ができなかった	153	299	33.85%	19	47.16	.000 ***
2 生活必需品が買えなかった	429	23	94.91%	3	364.68	.000 ***
3 家計が厳しくなった	392	60	86.73%	6	243.86	.000 ***
4 コロナに関する情報が足りなかった	388	64	85.84%	7	232.25	.000 ***
5 親戚や友人と会えなかった	71	381	15.71%	21	212.61	.000 ***
6 運動不足になった	250	202	55.31%	15	5.10	.024 *
7 生活リズムが乱れた	378	74	83.63%	8	204.46	.000 ***
8 林校/林園により子どもの面倒を見なくてはいけなかった	240	212	53.10%	16	1.74	.188 n.s.
9 子どもが家で勉強できなかった	431	21	95.35%	2	371.90	.000 ***
10 子どもが外で遊べなかった	235	217	51.99%	17	0.72	.397 n.s.
11 子どもがお友達と会えなかった	232	220	51.33%	18	0.32	.573 n.s.
12 子どものテレビやタブレット、スマホ、ゲーム機など電子機器のスクリーン使用時間が多かった	256	196	56.64%	14	7.97	.005 **
13 自分または配偶者(パートナー)の仕事に支障が出た	350	102	77.43%	10	136.07	.000 ***
14 家族が家でイライラしていた	329	123	72.79%	11	93.89	.000 ***
15 自分や家族の健康(体と心)が心配だ	258	194	57.08%	13	9.06	.003 **
16 家計(収入が減る・仕事なくなる)が心配だ	376	76	83.19%	9	199.12	.000 ***
17 林校により子どもの勉強が遅れるかが心配だ	398	54	88.05%	5	261.81	.000 ***
18 将来の生活に漠然とした不安がある	321	131	71.02%	12	79.87	.000 ***
19 コロナ禍がいつ終息するか、見通しが持てない	139	313	30.75%	20	66.98	.000 ***
20 今後の家族関係や夫婦関係、親子関係に漠然とした不安がある	407	45	90.04%	4	289.92	.000 ***
21 家族の間に、トラブルが多くなった	432	20	95.58%	1	375.54	.000 ***

※順位の大文字は上位の5位、大文字および下線は下位の5位を示した。

1位「家族の間に、
トラブルが多くなった」

2位「子どもが家で
勉強できなかった」

感染拡大初期である2020年4-5月の自粛期間に実施した調査では、

「親戚や友人と会えなかった」(91.03%),

「普段の外出ができなかった」(75.64%),

「子どもが外で遊べなかった」(57.69%) が多かった(孫他, 2021)。

☛ ほぼ2年経過した本研究の調査では、度重なる自粛要請のもとで困りごとの質が変化

「外出できないストレス」から「在宅によるストレス」へ

コロナの影響による関わりの変化

(1) コロナの影響で、あなた自身のお子さんに対する行動に変化を感じましたか？

→ 「変化した」と回答した母親は**147名 (31.42%)**

(2) コロナの影響で「増えた」行動は？

叱る (55.78%)

遊ぶ (53.74%)

怒る (44.90%)

子どもの話を聞く (44.22%)

スキンシップ (41.50%)

否定的 - 肯定的
どちらの関わりも増加

絵本を読む (29.93%) 話し合う (27.89%) , ほめる (24.49%) , となる
(16.33%) , ひどいことを言う (10.20%) , 脅す (3.40%) , たたく (2.72%)

関わりの変化と母親のQOLの関連

QOL低群と高群に分けて比較

「叱る」

「怒る」

「ひどいことを言う」

QOL高群 < QOL低群

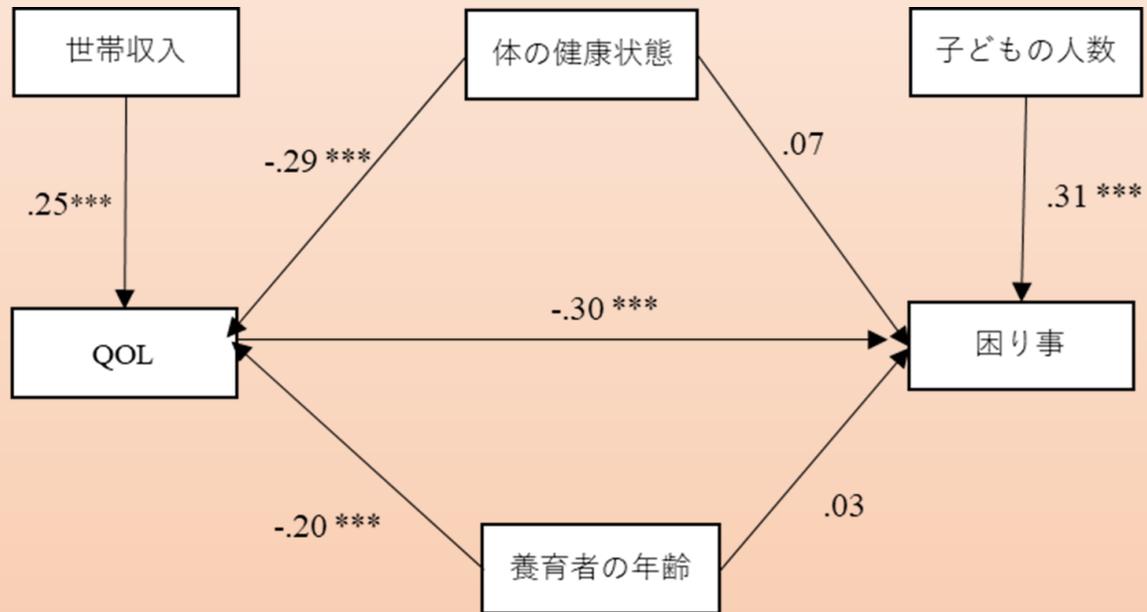
(順に $\chi^2(1) = 8.18, 6.83, 11.59$, いずれも $p < .01$)

表1 QOL高低別の子どもへのかかわりの度数分布 ($n = 147$)

質問項目	高群 ($n = 71$)		低群 ($n = 76$)	
	該当する	該当しない	該当する	該当しない
Q1 ほめる	19 (26.8%)	52 (73.2%)	17 (22.4%)	59 (77.6%)
Q2 話し合う	22 (31.0%)	49 (69.0%)	19 (25.0%)	57 (75.0%)
Q3 叱る	31 (43.7%)	40 (56.3%)	51 (67.1%)	25 (32.9%)
Q4 遊ぶ	39 (54.9%)	32 (45.1%)	40 (52.6%)	36 (47.4%)
Q5 絵本を読む	19 (26.8%)	52 (73.2%)	25 (32.9%)	51 (67.1%)
Q6 スキンシップ	32 (45.1%)	39 (54.9%)	29 (38.2%)	47 (61.8%)
Q7 子どもの話を聞く	37 (52.1%)	34 (47.9%)	28 (36.8%)	48 (63.2%)
Q8 怒る	24 (33.8%)	47 (66.2%)	42 (55.3%)	34 (44.7%)
Q9 どなる	8 (11.3%)	63 (88.7%)	16 (21.1%)	60 (78.9%)
Q10 脅す	1 (1.4%)	70 (98.6%)	4 (5.3%)	72 (94.7%)
Q11 たたく	1 (1.4%)	70 (98.6%)	3 (3.9%)	73 (96.1%)
Q13 ひどいことを言う	1 (1.4%)	70 (98.6%)	14 (18.4%)	62 (81.6%)

※Q12 (おしおきする) の設問は該当者が0名であったため、省略する。

家庭経済状況は養育者のQOLを介して、コロナ禍の困り事に間接的な影響を与えることが示唆



複数の子どもを持つ家庭に対して、育児生活の困り事に対する支援の必要性が高い。

The Impact of the COVID-19 Pandemic on Mothers' Quality of Life: A Longitudinal Analysis of Ibaraki Cohort Project

Shunto KIMURA*¹, Jietao LIAN*², Yi SUN*³, Yuko YATO*⁴

Abstract:

The spread of the 2019 novel coronavirus (COVID-19), which was confirmed at the end of 2019, has transformed our lives. Childcare was also impacted. Schools and childcare facilities were closed, and children were required to stay at home. This study aimed to determine the impact of COVID-19 on the quality of life (QOL) of mothers through a longitudinal study. Study 1 compared mothers' QOL before the COVID-19 pandemic with mothers' QOL during the pandemic and found that mothers during the pandemic had lower QOL in the "social relationships" category. In particular, significant score differences were found among mothers raising children aged 6 and 12 months. Study 2 compared mothers in 2021 and 2022 to determine whether the request to refrain from going out as a measure to prevent COVID-19 infection affected their QOL. Although QOL average scores were higher in 2022 when there was no request for self-restraint on going out, some participants' QOL increased from 2021 to 2022, while others experienced a decline in QOL. A common feature of these two studies was a significant change in "social relationships" scores. Thus, in the event of a pandemic such as COVID-19, supportive measures are needed to ensure that parents, especially those raising children, are not isolated.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/asiajapan/6/0/6_51/_pdf/-char/ja

行政機関との連携による 子育て支援システムの構築



コロナ禍での子育てのヒント

<https://www.kao.co.jp/lifei/column/60/>

覗かせよう!くらしのキレイ
くらしの研究 kao

新着記事
くらしのお役立ち情報

ランキング
みんなのアンケート

生活者の今・これから
『くらしの研究』について

達人コラム
プレゼント

[くらしの研究_TOP](#) > [達人コラム](#) > [\[達人コラム\]立命館大学教授 矢藤優子先生 「見ているよ」が伝わる子育てが子どもを伸ばす](#)

達人コラム

立命館大学教授 矢藤優子先生

「見ているよ」が伝わる子育てが子どもを伸ばす

2021.05.11 | 子育て



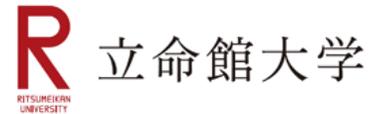
イヤイヤ期について

育児支援情報による適切なサポートが、親の育児負担低減の一助になることを確認

<https://www.kao.com/content/dam/sites/kao/www-kao-com/jp/ja/corporate/news/2021/pdf/20211008-001-01-01.pdf>



報道機関各位



立命館大学

2021年10月8日

育児支援情報による適切なサポートが、 親の育児負担低減の一助になることを確認

花王株式会社
立命館大学

花王株式会社(社長・長谷部佳宏)感覚科学研究所、サニタリー研究所と立命館大学(学長・仲谷善雄)総合心理学部の矢藤優子教授の研究グループは、育児支援情報による適切なサポートが、親の育児負担低減の一助になることを確認しました。

今回、乳幼児とのかかわり方に関する専門的な知識に、これまでの研究で見いだした子どもの社会性発達に良い影響を与えるかかわり方に関する知見を加えたうえで、日常生活ですぐに実践しやすい形にした、新たな育児支援情報を作成しました。この情報を親に提供することで、子どもへのかかわり行動や育児スト

育児に関するセミナーを受講することで、子どもへの接し方の改善，ストレスの抑制が見られた。

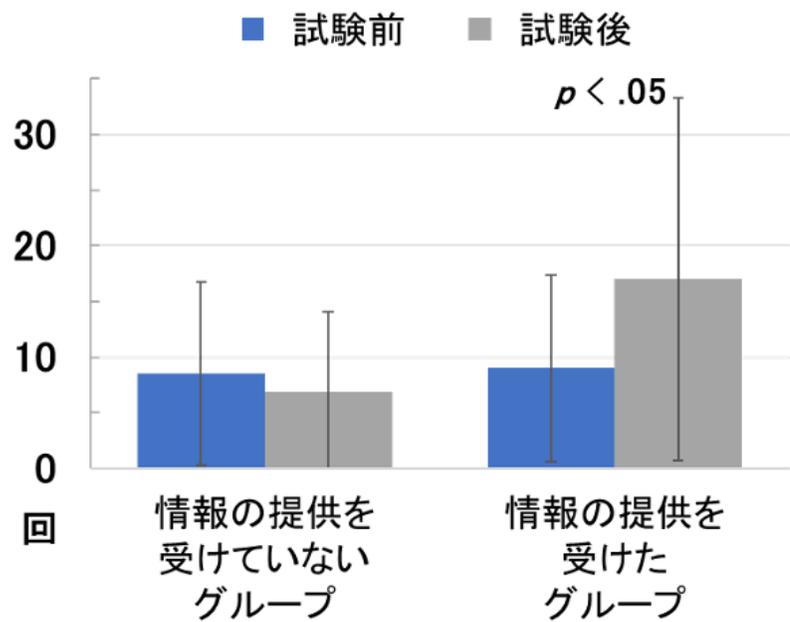
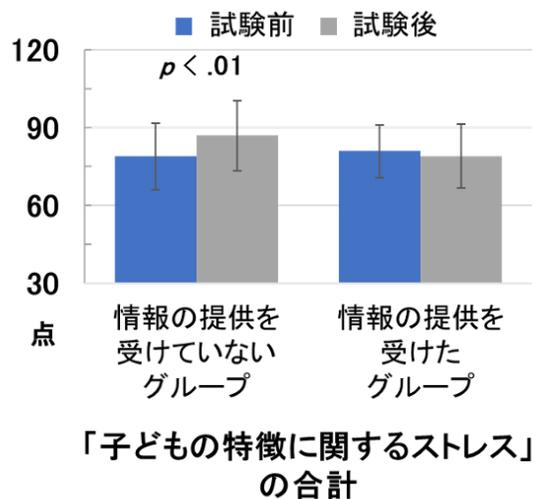
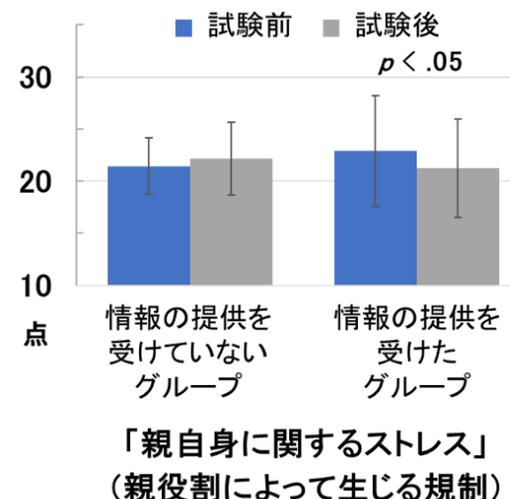


図2 おむつ替え時間全体での親の笑顔回数



「子どもの特徴に関するストレス」の合計

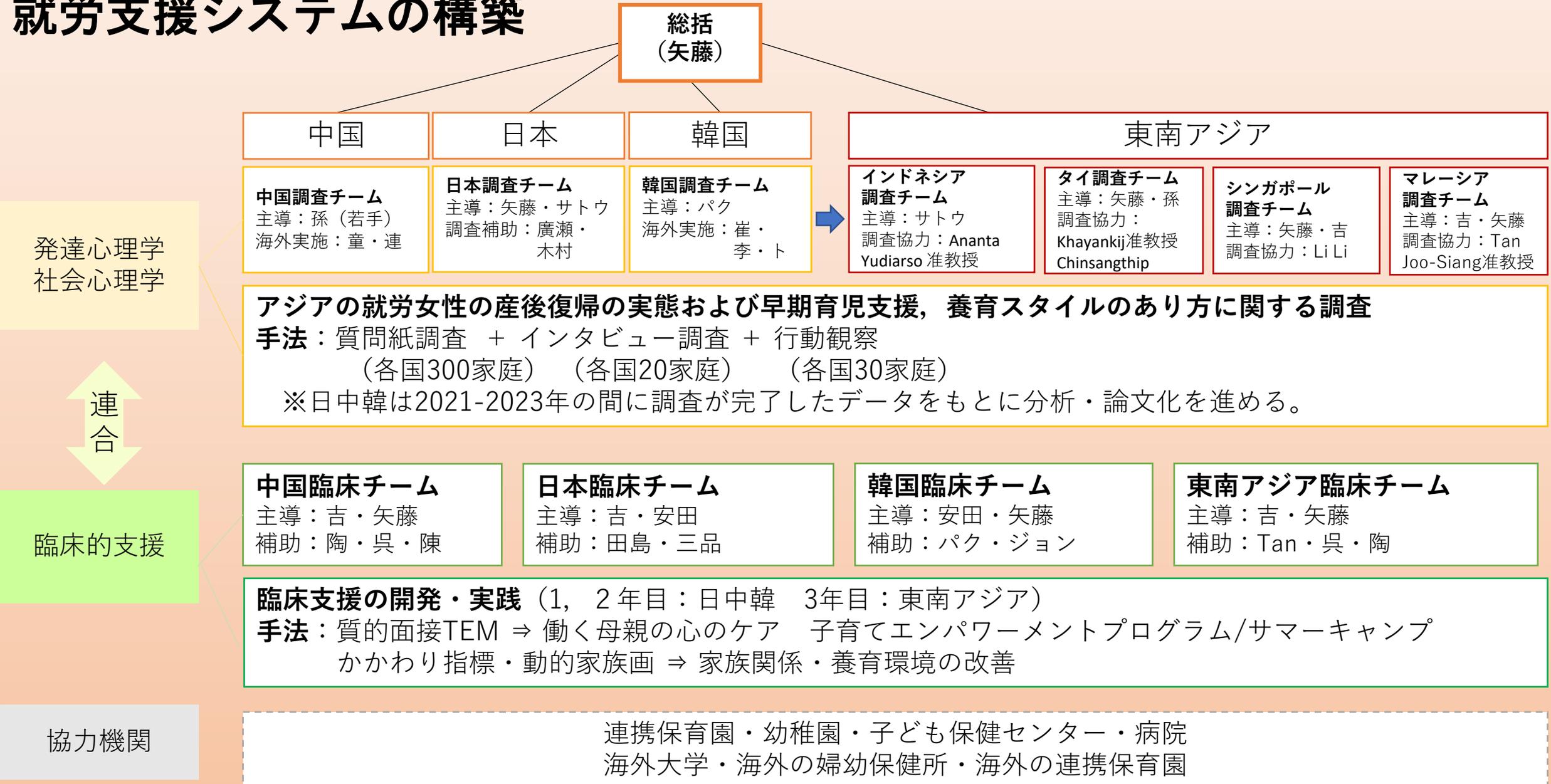


「親自身に関するストレス」(親役割によって生じる規制)

おもなセミナーの内容

- 子どもの認知・社会性発達の特徴
- 子どもの認知・社会性発達の特徴を考慮したかわり方のヒント
- 養育者の自己肯定感を高めるアドバイス

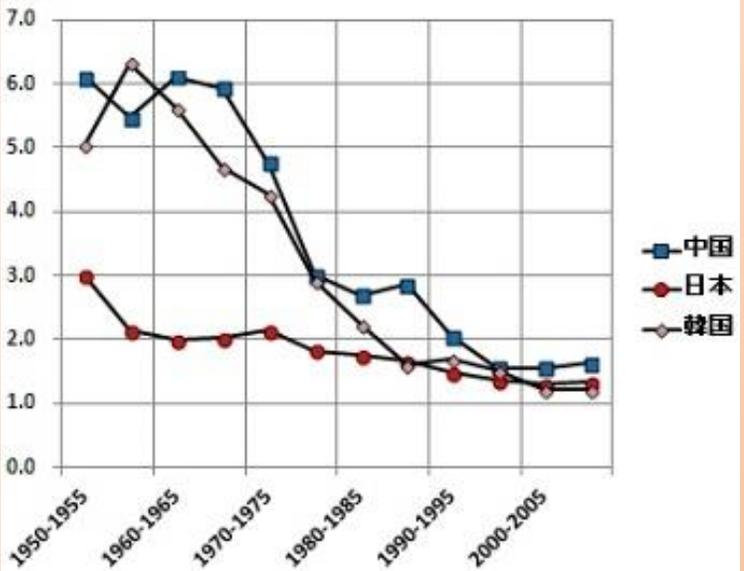
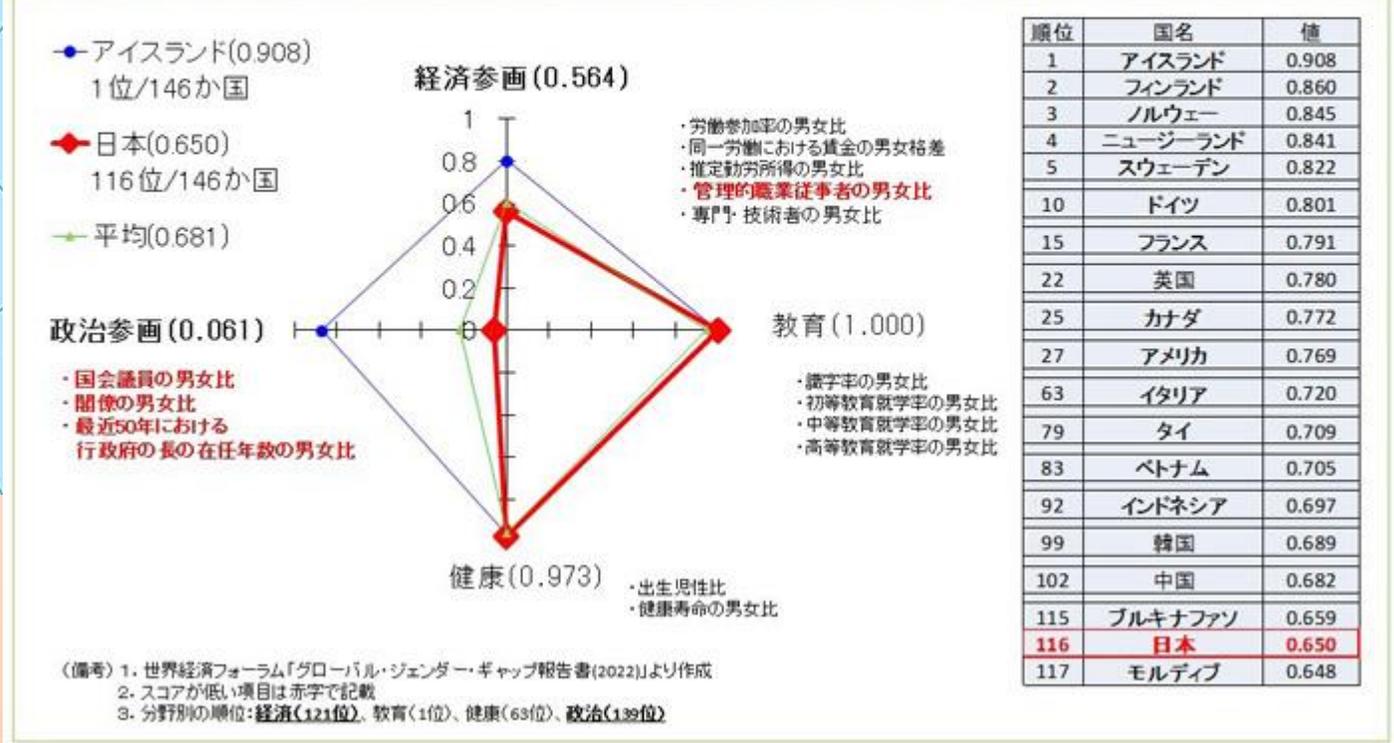
少子化が進むアジア諸国における科学的根拠に基づく女性の育児・就労支援システムの構築





ジェンダー・ギャップ指数(GGI) 2022年

・スイスの非営利財団「世界経済フォーラム」が公表。男性に対する女性の割合(女性の数値/男性の数値)を示しており、0が完全不平等、1が完全平等。
 ・日本は146か国中116位。「教育」と「健康」の値は世界トップクラスだが、「政治」と「経済」の値が低い。



Low status of women

Decline in birth rates

ご清聴ありがとうございました。

